

【研究ノート】

経済学の小説 ナッシュ均衡

増 田 辰 良

研究ノート

経済学の小説 ナッシュ均衡

増田辰良

—署長室にて。

「どうやって、自白させたのかね？」両手を頭の後ろで組んで、署長はにこやかに訊いた。

「署長。簡単でしたよ」M警部補はふっふっふと含み笑いを返した。

「ベテランのT刑事の厳しい尋問にも一切、口を割らなかつた連中を……どんな秘策を使ったのかな？」署長もつられて口元に笑みを浮かべ訊き返した。

「はい。種を明かせばですねえ。わたし、推理小説を読むのが大好きでしてえ、エドガー・アラン・ポウの『マリー・ロジエの謎』という古典的名作の中にヒントがありました。殺人事件の真犯人を探し当てる探偵C・オーギュスト・デュパンは、こう言ってます。

『「こういう条件になると、悪漢は賞金がほしいとか逃げだしたとかいう気持ちよりも、まず裏切られるのが、こわいものさ。だから、自分が裏切られたくない一心で、いわば相手に先んじて密告することになる。』』と(『ポウ全集2巻』167頁~168頁)。

—飲み屋にて。

酒飲みは一人で飲んでいても淋しい。話し相手が欲しいもの。酔っ払って目を据えたSがジョッキを手にふらふらとカウンター席に座る

Yに近づき、声をかけた。

「ここ空いてますかあ？」

「ああ。勝手に座ればいいだろ」すっかり酔いが回っているYは不機嫌そうな声を返した。

「ご機嫌、斜めですな」Sはとりあえず気遣った。

「ああ。生きているのが嫌になってね。毎晩、このとおり飲んでますよ」Yはやけっぽくそう言うと、ジョッキを口に運んだ。

「どうかしましたかあ？」Sは、なにか探るような声で訊いた。

「職が見つからなくてえ」そう答えると、Yは首を垂れた。

「えっ？ あんたもかい？」その横顔へ酒臭い息を吹きかけるようにSが言った。

「という、そっちは？」Yは垂れたまま首をSに向けた。

「わたしは(右手で首を切る仕草をする)2年前にリストラされて、職探しに疲れ切ったって感じです。中年で、これといった能力がないと、どこも雇ってくれません。あゝあ、ですわ」

「ほお。偶然ですなあ。わたしもその頃にリストラされて」Yは首を上げて言った。

キーワード：ゲーム理論、ジレンマ、ナッシュ均衡。

「わずかな退職割増金も支給されましたが、それも貯金もすぐに底を突いてしまいました。貯めるには時間がかかるけど、なくなるのは早い。リストラされてからは貧乏神に取り憑かれたようでえ、パチンコ、パチスロも負けてばかりですよ」そう話すSの声は自虐的に聞こえた。

「こつちも同じですよ。競馬、競輪、どれも連敗続きです。あくあ。きれいさっぱりと一文なし。はっはっはっ」Yは口を天井へ向けて自嘲気味に笑ってから、続けた。

「なにか、簡単に金が入る方法はないですかね？ 簡単に金がある……」

それを聞くとSはジョッキを口に運び、ビールをグイグイと喉に流し込んでから、思わせ振りの目をして、

「ある。あんたにその気があるなら、ある。すぐにでも金を手にできると、強い口調で答えた。

「えっ？ ありますか？」Yはキョトンとした顔でSを見返した。

「あるところにはある……」と、一呼吸おいて、「ATMを襲撃してみないか？」Sは平然と提案し、（金に困っているカモが……相棒がいた。へっへっへっ）ほくそ笑んだ。

「おいおい、なにを言い出すんだ。襲撃だなんて、強盗じゃないか。冗談はよしなさい」Yは一気に酔いが覚めた気分でごう論した。

それでもSは怯むことなく正面を見据えて言った。

「いい物件があるんですよ。へっへっへっ」

「物件？」

「そう。わたし、リストラされる前は住宅販売の営業をしてましてね。物件を見るだけは利くんです。へっへっへっ」

「ほう。住宅販売ですか？ わたしも営業をやっていました。車のディ

(11)

ラーですがね。営業成績が上がらなくてえ」

「上がらなかつたのはわたしも同じですよ」ずれて行きそうな話題を戻し、Sはきよろきよろと顔を動かしてから、「で、物件ですがね」顔をYの耳に近づけて、声を落とし、「小谷地の地下鉄駅近くに大学があるでしょ」

「ああ。ありますね。神社と寺の間に……小さな大学ですよね」

「はい。わたし、あの大学の卒業生なのですが……生協会館の一階にATMがあつて、これがあ、まったくの無防備なんです」

「ちよ、ちよっと待つてください。本気ですか？」Yは顔を後ろに引いてウソだろ、という目付きでSを見た。

「あんたはどうなの？ 金、欲しいんだろ？ シャレや冗談でこんな話はしませんよ。乗るの？ 乗らないの？」Sは凄む目付きをして、シラツと言った。

「いえっ、えり、まあ、そりゃあ、乗りますよ」Yは困惑した表情を浮かべたが、つられて同意の言葉を吐いた。

「じゃあ聞きなさいよ」Sは語気を強めた。

「いえ、でも大学なら、警備が厳しいでしょ？」と、慌てた口調で訊くYの心配にかまわず、Sは涼しい顔で続けた。

「いいや。厳しければ、提案なんてしませんよ。警備員がいるのは本部のある建物の一箇所のみで、現場からはうんと離れています。いつでも誰でもキャンパスに入れますし、逃げるのも簡単です。（バカにした声で）これを開かれた大学と呼ぶですよ。へっへっへっ」一息おいて、「爆弾を仕掛けても……。そうそう最近じゃあ、女子トイレで

の盗撮が頻繁にあるそうです。へっへっへっ」

「へっへっ？ 盗撮ですか？」

「はい。あんた興味あるの？ あるような顔付きだね。へっへっへっ

「はい。あんた興味あるの？ あるような顔付きだね。へっへっへっ

「はい。あんた興味あるの？ あるような顔付きだね。へっへっへっ

つ。部外者が自由に建物に入れますからねえ。この点は昔とちつとも
変わっちゃいませんよ。ほんと、おめでたい大学です……」

陽気にしゃべるSの話を止めて、Yはなおも不安そうに訊いた。

「で、ATMは？」

「おお。ATMがあるところは建物の端っついで、幸い右側は上り坂に
なっていて、おまけに背丈の高い針葉樹が植わっています。道路から
見上げて樹の根元しか見えません。正面さえしつかり警戒すれば、
左右からは誰にも見えない場所ですよ。学生の頃には、その場所は喫
煙コーナーとして使われていました。完璧な死角になっています」

言い終ると、Sは口元に不敵な笑みを浮かべた。

「うん。そうですかあ。で、ATMを襲撃するとして、夜ですよね」

Yの声は真剣だった。

「もちろん」Sは分かり切ったことを聞くな、という顔をした。

「いえねえ、わたしは大学へ進学できるほどの学力がなくて、誰でも
入学できる低レベルの私立の高校しか卒業してませんので、大学のこ
とはよく知りませんが、聞くところによると、夜でも先生たちが研
究室に泊まり込んで勉強をしているのじゃないですか。図書館だっ
て、11時くらいまで開けているのが普通だし。キャンパス内で人に遭
ったりしませんか。すぐに見つかっちゃいますよ」

Yは不安に満ちた声音でこう確認した。

「その点は心配ご無用です。へっへっへっ。卒業生としてお恥ずかし
いことですがあ、講義中に学生がワイヤレスイヤホンで音楽を聴いて
いても、ゲームをしても、寝ていても、途中で退席しても、卒業
させてくれる、いやさせている偏差値30の大学ですよ」ここでビール
をぐいっと飲んでから、「勉強しないのは学生も教員も同じです。夜
中まで灯りの点いている研究室なんてありませんって。愚民の楽園で

すから」

そう言うと、Sはニッと口元を歪めた。

「へっつ。そんな低レベルの大学なんですかあ」

「あんたでも受かる。公衆便所ですよ」

「公衆便所？」

「はい。誰でも入れる、入学できることです」

「なるほどお。うまい表現ですねえ」Yは感心して頬を緩めた。

「んっ。学生の頃から、世の中、ずっと人手不足でえ……3÷2の計
算ができないヤツらでも地銀や信金に就職しましたけどね。へっへっ
へっ。3÷2ですよお」

「3÷2ですかあ？」と、Yは思案してから「0.6ですよね？」はっき
りとそう答えた。

「んんっ？」Sは一瞬怪訝な目でYを凝視してから、「いつでもどこ
からでもキャンパスに入れるので先日、下見をして来ましたが、いま
だに危機管理も底抜けでえ、防犯カメラなんて建物の出入口口にし
か設置してないんですよ。はっはっはっ」と、わざと低く笑い声を洩ら
した。

「なるほどお。下見ですかあ。卒業生だけあって、細かい事情をよく
ご存知ですね」

それには答えず、またニッと口元を歪めてから、Sはジョッキをグ
イッとあおった。

Sがジョッキを下ろすと、Yは目を輝かせてSに耳打ちした。

「じゃあ、いつやるか？」

「今でしょ！」間合いをとってから、Sは微笑みながら答えた。

「シャレは止めてくださいよ！」思わず、Yは怒ったように返した。

「明日で、どうですか？」Sはすぐに真顔に戻り、Yのイエスという

目を確認すると自然と、声が大きくなった。「わたしがハンマーと電動工具を準備します」

「声が大きいですよ」と、Yは立てた右手の人差し指を唇に当てて、きよるきよると目を泳がせてから、「じゃあ、ボールを持っていきます」と、小声でにっこり笑った。

「明日の夜中0時に西郷通の地下鉄小谷地駅の5番出口で落ち合いますよ。誰にもしゃべっちゃいけませんよ。いいですか。3分以内にやっつけて、声を落としましょう。それ以上だと、警察が来ます」Sは顔をYに近づけて、声を落として言った。

「OK」Yも低い声でそう答えてから、ジョッキをSにかざした。

SもジョッキをYにかざし、「前祝として、乾杯！」と雄叫びを上げた。

ジョッキが「カチン〜！ カチン〜！」と音を立てた。

―翌日の深夜0時20分頃。

2人はハンマーで窓ガラスを割り、難なく建物に侵入した。すぐに防犯カメラをボールで叩き壊した。次にATMを塞ぐシャッターを電動ノコギリを使って破った。たちまち、警報器がけたたましく鳴り響いた。互いにギョと見開いた目と目を見交わした。

両手を小刻みに震わせながらATMの横に付いた扉をボールを使ってこじ開けようとした。が、鳴り止まない警報器の音に怖気づき、道具を放り出してしまった。犯行遂行予定時間の3分も迫っていた。「ヤバイ!!」「ヤバイ!!」どちらからともなく道具をバッグに仕舞うと、ファーフア〜と声を出し、慌てふためいて一目散に逃げ出した。すぐ近くの自転車置き場の陰に身を潜め、軍手を花壇に投げ捨てた。

しばらくすると、パトカーのサイレンが近づいてきた。どうやら、正門前に停まったようだ。そのときには、2人はグラウンドを横切り、

(四)

サークル棟の端から林を抜けて裏通りの高速道路沿いを興奮冷めやらぬまま歩いていた。最初の信号機をSは左へ、Yは右へ曲がって、闇に消えた。

誰が警察へ通報したのか？ 警備員ではなかった。それはキャンパスを通り抜けていた帰宅途中のサラリーマンであった。警報器の音が鳴り響き続ける薄暗闇の中を2人組が走って逃げるのを目撃したのである。

3日後、容疑者の男たちは最寄の警察署で任意の事情聴取を受けた。犯行日の午前と午後ハンマーやボール、電動工具類を2条7丁目のホームセンターで購入している映像が防犯カメラに映っていたからである。

―捜索会議室にて。

「署長。ATM襲撃犯の身元が割れました。壊された防犯カメラの映像を復元したところ、人物が一致しました。また、花壇に捨てられていた軍手の指紋も一致しました。襲撃に使われた道具類も両名のオートから押収しました。電動ノコギリの刃先には破られたシャッターの破片も付着していましたので、両名の犯行に間違いありません。なお、両名とも犯歴はありません」

書類を手にT刑事は、そう説明した。

「犯歴なし。で、犯人は？」

「一名は吉田和行、42歳。もう一名は鈴木晃、44歳です。吉田は高校を卒業後、車のディーラーに勤務し、鈴木は大学を卒業後、住宅販売会社に勤務していたようです」

「ようです？」

「はい、両名とも2年ほど前に個別解雇されています。営業成績がパ

ッとしないうことと、勤務態度が怠慢すぎたようです」

「勤務が怠慢とは？」

「はい。営業中にパチンコ店やカラオケ店に入って時間を潰したり、競馬新聞や競輪新聞を読んだり、営業車の中では必ずと言っていいほど仮眠を取っていたようです。また、取引先へ契約書を届けるのを怠ったりと、やる気がない姿勢が頻発していたそうです。吉田については、横柄な態度でお客に接することが多くて、トラブっていたようです。で、兩名とも多大な損害を会社に与えてきたという理由で解雇されたもようです」

「でも、鈴木は大卒だぞ。そんな勤務態度では即、首を切られることくらい認識できていただろ？」

「ところが、署長。大卒と言っても公衆便所のようなもので、偏差値が30そこそこの大学ですから、学歴を金で買ったようなものですよ。ああ、これは重要な情報ですが、鈴木は犯行現場となった大学の卒業生でした。吉田の卒業した高校は市内でも最低クラスです。どこも受からない生徒さんを受け入れている私立の高校です」刑事の目はどこか笑っていた。

「大学のOBかあ。現場に詳しいわけだ」右手を顎にそえた署長の声は納得していた。

「解雇にあたっては、兩名とも会社の温情で退職割増金も支給されたようですが、きつとギャンブルでそれも底を尽いたのでしょう。鈴木については、近所のパチンコ店への入出店が頻繁に観察されています。吉田は、駅の売店で競馬新聞を買う姿が防犯カメラに数多く映っています。ハローワークにも事情聴取してみました。兩名とも転職がうまくいかず、投げ遣りだったそうです」

「うん。で、家族は？」

「結婚はしていないようです」

「兩名とも？」

「はい。兩名とも独身です。身辺に特定の親しい女性がいた形跡もありません」

「生活費に困って、やったと。短絡的な動機だと」

「はい」

「単純そうに見えても、初犯の者は罰を恐れて、意外と口を割らないからな」そう言うと、署長は両手を組んで頭の後ろにやった。

「そうですねえ」T刑事は顔を引き締めた。

— 取調室、401号室にて。

「おい、鈴木よお。ずい分とだんまりを決め込んでくれてるそうだな。4日もしゃべってないってか？ ベテランの刑事さんも愛想を尽かしたそう。そんなに手を焼かせるなよ。今日から俺、Mが担当させてもらうからな」M警部補は鈴木を睨みつけて、そう言った。

「……」鈴木は慥然とした顔でそっぽを向いていた。

「早くけりをつけようぜ。吉田とつるんでやったんだろ？ なあ、自分が卒業した大学のキャンパスなら、どこにATMがあって、どこから入って、どこをどう逃げればいいのかってことは十分に分かっていたんだよな。……おい！ 天井、卵井、カツ井、いくら食わせればしゃべってもらえるのかな？ お前さんへの食事代がかさむばかりだ。この税金泥棒。えっ！」

「だから、刑事さん。吉田なんて男は知りませんよ。わたしはやってません。いいかげんに解放してください」

「おお、しゃべれるじゃないかあ。おい。吉田もお前さんのことを知らない、とほざいているそう。捕まる前に黙秘を約束したのか？」

えーっ！ でもなあ、道具を買っている姿がホームセンターの防犯カメラに映っていたし、壊された防犯カメラにもばっちり映っていたのよ。電動ノコギリにはシャッターの破片も付着して、きれいな花壇の中からは汚い軍手も見つけた。およそあつてはいけない、お前さんたちの指紋が付いていたんだ。これだけ証拠がそろえば……なあ、もう疲れただろ？」

ここで警部補は話を止め、鈴木顔を覗き込んだ。

「……」鈴木は微かに目を泳がせたが顔を背けた。

「2人でつるんで、やったんだろ。早く吐いてしまえ。初めてなんだろ？ 強盗は。こつちはすべてお見通しだ。楽になれや。なあ、鈴木」

警部補はまた鈴木顔を覗き込んだ。

「やってません。そんな場所にも行ってません。その吉田というヤツに訊けばいいでしょ」

鈴木は顔を大きく動かした。

「いつまでシラを切り続けるんだ！ そうだよな。相棒に訊けばいいんだよな。でもなあ、吉田も口が堅いんだ。お前さんと一緒でえ。黙ってりゃあ、初犯でもどどん罪は重くなるぞ。すでに家宅侵入罪、器物損壊罪、逃亡罪、強盗未遂罪が科せられる。早く自白すりゃあ、罪も少しは軽くなる」

(この野郎と) 眉間に皺を寄せたまま、警部補は鈴木をポンポンと打ってから、

「40過ぎて、首を切られりゃあ、食っていくのも大変だっただろ？」

と、優しい声をかけた。

「は。リストラされて」鈴木は俯いたまま思わず細かい声を洩らした。警部補は、また鈴木をポンと打って、「おい、鈴木。教えてやろう」と続けた。「お前はリストラじゃなくて単なる解雇、個別解雇された

(六)

んだ。リストラとは経営危機を乗り切るために仕方なく解雇することだ。どこの経営者も社員の首は切りたくないだろ。会社をもたせるために首を切るんだ。それがリストラだ。お前の会社はそんな危機的な状態ではない。経営はいたって健全だ。仕事があるにも関わらず解雇されたんだ。お前のサボりが原因だ。これを個別解雇というんだよ。お前、大卒だろ。労働法なんかの講義で習っただろ？ んっ？」

「……??」

「世の中、人手不足と騒いじゃいるが、中年の転職は大変だ。特別な能力が無きゃあ、なあ。真面目に仕事をしてりゃ、こんな悪さも思いつかなかつただろうに。パチンコ、パチスロじゃあ、食っていけんし。……お前さん、偏差値30の大学卒だろ。自分のお頭で考えて問題を解決する習慣を身に付けていないからな。金で学歴を買ったようなもんだろ。学費を工面してくれた親に申し訳ないだろが。親の身にもなってみろ。こんな情けないことはないぞ」

と、ここで間を取り、また肩をポンポンと打ち、

「俺も忙しいんだ。そこでだ。鈴木よお、ものは相談だ。お頭を使って、俺が作ったゲームをやってみないか？」言い終ると、警部補は鈴木を睨みつけてから、ニツと歯を見せて笑った。

「えっ？ ゲーム？」鈴木はうな垂れていた顔をすりと上げた。

「ああ、そうだ。吉田が自白する前に、なんとかお前さんを助けてやりたくてさ。人生はリベンジできなくっちゃ、なあ、やってられんよな。プロ野球じゃあ、カムバック賞もある。はっはっはっ」警部補は声を出して笑った。

鈴木は任意同行を求められたときから一夜限りの相棒が自白するんじゃないか、と心中穏やかではなかった。それに黙秘を続けることに

疲れを感じていた。

「(もう限界だ。この状況には耐えられん) どんなゲームですか?」

鈴木は顔を強張らせ身を乗り出す勢いで訊いた。

「よーし。やるんだな?」警部補は目の奥を光らせた。

「はっ、はい」

「その代わり、一度決めたことには、必ず従ってくださいよ。これ以上、お前さんに関わっている暇はないからな。いいかあ?」警部補は語尾を強めた。

「はっ、はい。分かりました」

警部補は胸ポケットからメモ用紙を取り出し、鈴木の前に広げた(表 1 参照)。

「これを見てくれ。数値はブタ箱へ入ってもらう年数だ。これまでにあった類似の事件から推測した年数だからな。このペアになっている数値の前に書いてある数値が、お前さんの服役年数になる。お前さんの選択肢は 4 つある。いいか、よく理解しろよ。吉田がこのまま黙秘をし、お前さんも黙秘を続けられれば、2 人とも 1 年(1、1)だけ服役してもらおう。そのとき、お前さんが自白すれば、すぐに釈放してやる。その代わり、吉田を 5 年(0、5)ぶち込んでやる。よく聞けよ。ここが肝心だ。吉田が自白するとき、お前さんが黙秘

表 1. ゲームの解

		吉田	
		黙秘	自白
鈴木	黙秘	(-1, -1)	(-5, 0)
	自白	(0, -5)	(-3, -3)

注. 括弧内の前にあるのが鈴木の前、後ろが吉田の前である。ゲーム論では利得表と呼ぶが、マイナスの数値が大きいほど、服役期間が長いことを意味する。組合せの(-3, -3)はナッシュ均衡、(-1, -1)はパレート最適である。

すれば、お前さんには 5 年服役してもらおう。吉田はすぐに釈放してやる(-5, 0)。吉田が自白をして、お前さんも自白をすれば、2 人とも 3 年(-3, -3)服役してもらおう。こんな年数になっているんだ。いいかあ。この表を見て、よくよく、考えてから黙秘を続けるべきか、自白すべきか、を選べ。ただし、選べるのは 1 回限りだ」ここで一息おいて、「安心しろ。吉田には、お前さんがどれを選んだのかは教えない。さあ、よく考えてから好きなように選べ。お頭を働かせろよ」そう言うと、警部補は腕を組んで天井に目を移した。

鈴木はメモ用紙を睨みつけ沸騰しそうな頭をフル回転させて考えた。(あいつとは飲み屋で偶然知り合っただけの仲だ。どこの馬の骨かも知らない。いや、知らなくてもいい。もう、遭うこともないだろう。そんなあいつが俺のことを気遣ってくれる保証はまったくない。あいつに先に自白されて、俺が黙秘を続けられれば、5 年、ぶち込まれる。あいつは釈放される……こりゃあ、たまったもんじゃない!俺が自白をして、あいつが黙秘をすれば俺は釈放され、あいつは 5 年ぶち込まれる。へっへっへっ。自白しかない)

「刑事さん!」

「おお。選んだか?」

「確認させてください」

「おお。なに?」

「わたしが先に自白すればすぐに釈放されて、あいつは 5 年服役させられるのですか?」

「ああ。そうだ。そういう数値になっている。お前さんを助けたくてな」警部補の目はまた笑っていた。

「(突然、頭を下げ)すみませんでした。吉田という男と共謀して A

TMを襲撃しました。リストラされて転職先も無く、金に困ってやりました。ヤツとは飲み屋で偶然知り合いになって、身の上話をしているうちに、ヤツもリストラされていて……飲んだ勢いで強盗しようとして……やっしまいました。すみませんでした」鈴木はさらに深く頭を下げた。

「よし、よく、しゃべってくれた。それはウソじゃないだろうな」警部補は一瞬、笑みをこぼしたが、すぐに眉をつり上げて睨みつけた。

その目力に押され、鈴木は、

「ウソじゃないです」

と、上体をやや後ろに反らして答えた。

「他に共犯者はいないのか？ えっ？」警部補の目は疑心で溢れていた。

「いません。吉田という男のみです」鈴木はきっぱりと言った。

「ああ。分かった。余計に疑って、すまんかったあ。で、どっちが持ち掛けたんだ。んっ？」

「はい。わたしです。卒業した大学のキャンパス内ですから、警備の状況や逃げ道もよく分かっています。それに学生の頃、あのATMはまったくの無防備だと友人たちとも噂していましたから。すつ、すみませんでした」そう言う鈴木は今にも泣き出しそうな顔をしていた。「なるほど。計画的な犯行だな。でも、幼稚でくだらん悪さをしたもんだ。下手糞な推理小説にもならん。ふん。安心しろ、これで少しは罪も軽くなるぞ」と言つて、警部補は供述調書を読み上げて、同意を取ってから、「じゃあ、この調書のここへサインをしてくれ」と、安堵した声音でボールペンを差し出した。

その署名を確認してから、警部補は、

「鈴木。リストラの意味が違うよな？ さつき教えたな。個別解雇だ

ぞ。しっかり復習しておけよ」ふっふっふつと微笑を浮かべた。

その頃、別の取調室では吉田も同じ表を見せられて、選択を迫られていた。結果、鈴木と同様に自白した。

再び、署長室にて。

「と、いうわけですよ」M警部補はニコニコと笑った。

「なるほどお。うまく考えたものだな」署長は右手で顎をさすりながら返した。

「なんてことないですよ。ずぶのド素人なら、黙秘を続けるにも3日が限度でしょ。時間が過ぎるほど、相棒のことが気になるものです。

それに兩名とも中学生レベルの学力ですから。賢く考えられんでしょ」

警部補は白い歯をこぼした。

「確かに、賢くはない」署長もつられて微笑み、「ところで、カラクリは？」と訊いた。

「はい」警部補は、自信に満ちた声で続けた。

「探偵デュパンは、こうも言っています。『巨額の懸賞金がかかっている上に、無罪放免が約束されているとなれば、まあこれはどんな仲間だつてそうだけでも、ましてや下等なごろつきの一団となれば、とうの昔に共犯者を密告する者が出てくるはずだ』と『ボウ全集2巻』167〜168頁。釈放というアメと5年の服役というムチをうまく使い分けたということですよ」

「それもありもしない架空の数値だろ」署長はふっふっふつと笑みを漏らした。

「はい。学生時代に経済学で勉強した囚人のジレンマ(注)という初歩的なゲーム論ですけどねえ。ボウはあの時代にすでにその存在を知っていて、効果を理解していたようですよ。その偉才振りには驚かされ

ます」

「で、警部補は連中をアメ(甘い)―悪党だと見抜いて、そのムチ(無知)を使ったと。ふっふっふっ」署長はまた笑みを漏らした。

「そうです」

「さすがは偏差値75の大卒だな。感心、感心」署長はうんうんと頷いた。「いいいえ、勉強すべきときにちゃんと勉強しておけば、いつかはなにかで必ず役に立つことがある、ということですよ。それだけのことで」警部補はことも無げに答えた。

署長と警部補は顔を見合わせ、思わず出そうになる高笑いをかみ殺した。

―その後。

大学は警備について警察から指導を受けた。

「今どき、昼夜を問わず、キャンパス内を部外者が自由に出入りできる大学なんてありませんよ。ウォーキング途中の市民や行人がトイレに立ち寄っているそうじゃないですか。この大学の危機管理は全くもって杜撰(ずさん)です。噂では、この数年、女子トイレでの盗撮があるそうですね。事件になる前に対策をしっかりとってください。社会に迷惑をかけていることを自覚してください。ここは教育の最高学府でしょ?? 最低限、キャンパスの周りにはフェンスを設置するべきですよ。防犯カメラも性能のいいものを主要な場所にもっとたくさん設置しなさい」警察署長は呆れ返った顔をして大学の責任者たちを、こう指導した。

この指導に従って、大学は防犯カメラの設置台数を増やした。しかし、今もってフェンスが作られることはなく、昼夜を問わず、部外者、近隣住民たちはキャンパス内を自由に通行している。これをもって、

この大学は今も「開かれた大学」を自認しているようだ。能転(のうてん)気にもほどがある。

フェンスを作ることに協(同)調する雰囲気のない中で、一人「作りましょう」と声を上げる、言い出しつべは割を食いがちです。出る杭(い)は打たれる。でも、「損してトク取れ」の精神で、誰かが声を上げないと、全体として利得が減ることになります。これは志願者のジレンマゲームを見れば明らかです(表2参照)。ナッシュ均衡は2つありますが、利得の小さいほう(5, 5)で均衡し、大きいほう(10, 10)へ移行できない状況です。慣れっこになった協調の雰囲気を出して、全員で裏切れば、全体に大きな利得をもたらします。このジレンマは組織が崩壊へと向かう兆の一つです。あゝあゝあ、残念ですねえ。

表2. 志願者のジレンマ

	大学の責任者	
	協調	裏切り
各スタッフ	協調	(5, 5)
	裏切り	(0, 5)
		(5, 0)
		(10, 10)

注. ナッシュ均衡は2つあるが、利得の小さい(5, 5)で均衡し、大きい(10, 10)へは移行できない状態である。

注1. このゲームはいわゆる囚人のジレンマ・ゲームである。囚人のジレンマ・ゲームでは支配戦略均衡が存在する。そして、それは純粹戦略ナッシュ均衡と一致している。ここでは(邪道の誹(そと)りを免れないが)、囚人のジレンマ・ゲームの混合戦略ナッシュ均衡を考えてみる。

鈴木(S)は確率 q で「黙秘」を、確率 $(1-q)$ で「自白」を選択し、吉田(Y)は確率 p で「黙秘」を、確率 $(1-p)$ で「自白」を選択するとしよう。

鈴木が純粹戦略「黙秘」をするときの期待利得は、

$$E_S(\text{黙秘}) = q(1) + (1-q)(-5) = 4q - 5$$

(九)

純粹戦略「自白」をするときの期待利得は、

$$E_5(\text{自白}) = q(0) + (1-q)(-3) = 3q - 3$$

となる。このとき、 $0 \leq q \leq 1$ なので、いかなる q についても純粹戦略「自白」をすることで期待利得は大きくなる（服役期間は短くなる）。

例えば、 $q = 0.5$ のとき、 $E_5(\text{純粹}) = -3$ 、 $E_5(\text{自白}) = -1.5$ となる。

同じく、吉田にうつせば、

$$E_4(\text{純粹}) = p(-1) + (1-p)(-5) = 4p - 5$$

$$E_4(\text{自白}) = p(0) + (1-p)(-3) = 3p - 3$$

となり、 $0 \leq p \leq 1$ なので、いかなる p にうつしても純粹戦略「自白」をすることで期待利得は大きくなる。

よって、混合戦略ナッシュ均衡でも純粹戦略（自白、自白）が選ばれる。

引用・参考文献

- エドガー・アラン・ポウ（丸谷才一訳）（1842）「マリー・ロジェの謎」『ポウ全集2巻』東京創元新社、1963年、119～173頁所収。
- 五輪教一・山崎憲久（2019）『街角の数学 数理のおもむき かたち風雅』日本評論社。
- 江戸川乱歩（1923）『二銭銅貨』『江戸川乱歩短篇集』岩波文庫、2017年、5～38頁所収。
- （株）公募ガイド社（2019）『その小説に「謎」を』『公募ガイド』11月号、7～25頁参照。
- 太宰治（1935）『川端康成へ』『もの思う葦』新潮文庫、1999年、194～197頁所収。初出は『文学通信』（1935年）『川端康成へ』太宰治の芥川賞への執念』彩図社文芸部編『文豪たちの悪口本』彩図社、2019年、14～17頁所収。
- 太宰治（1946）『貨幣』マイク・モラスキー編『闇市』新潮文庫、2018年、20～30頁所収。
- 太宰治（2009）『春の盗賊』『落語の影響を受けた太宰治短編集』パブリック・ブレイン、139～183頁所収。
- マーク・トウェイン（堀川志野舞訳）（2017）『百万ポンド紙幣』『百万ポンド紙幣』理論社、147～203頁所収。

松原望（2001）『ゲームとしての社会戦略 計量社会学で何がわかるか』丸善ライブラリー。

武藤滋夫（2001）『ゲーム理論入門』日経文庫。

付記。この作品の内容はフィクションであり、筆者が所属する組織とは一切関係ありません。

